

「共に喜ぶ」

フィリピの信徒への手紙 二章二―一八節

南山教会 二〇二五年六月二九日

大塚勁

先週、南山教会では、初夏の特別伝道礼拝・特別集会をまもりました。信仰の先達であるウィリアム・メレル・ヴォーリズの信仰とその生涯について学び、励まされる時をすごしました。その中で、チラシを見て、初めて教会に足を運んでくださった方が三名与えられたことも喜びでした。この地域に教会がある。キリストとの出会いが備えられたことは大きな喜びでした。

今日ご一緒に読みましたフィリピの信徒への手紙二章一二節から一八節には、「喜び」という言葉が何度も繰り返されています。このフィリピ書全体においても、「喜ぶ」「喜びなさい」という表現が繰り返されており、実に新約聖書の中でも最も「喜び」に満ちた手紙のひとつであるといわれています。「喜びなさい」と命令口調でかかれていることも驚きです。喜びは自分の内から湧き出てくる感情なのだから、「命令されるものではないだろう」とも思っています。ですが、それほどまでに強く語れる確証がパウロにはあったのだと思わされます。けれども、この手紙が書かれた背景を思い起こすとき、私たちはある驚きを覚えます。というのも、この書簡はパウロが牢獄の中から書き送ったものだからです。自由を奪われ、死の可能性さえある不安の中で、パウロはなぜ「喜びなさい」と語ることができたのでしょうか。今日はこの「喜び」について、御言葉を分かち合いましう。

パウロがフィリピの教会に宛ててこの手紙を書いたのは、ローマの獄中にあった時期とさ

れています。彼は今、自由も名誉も奪われ、もしかすると殉教をも覚悟しなければならない状況にありました。

けれども、そのような極限の中でパウロがフィリピの教会の人々に語る言葉は、「喜びなさい」「共に喜びましょう」というものです。

ここに、福音の逆説的な力が現れています。喜びは、外的状況によって決まるものではなく、神との関係によって湧き上がるものなのです。一三節でパウロは次のように語ります。

「あなたがたの内に働いて御心のままに望ませ、行わせておられるのは神だからです。」

わたしたちが信仰に生きるとき、背後には神ご自身のはたらきがある。わたしたちの内に神が働いている。だからこそ、苦難の中でも自分の内に働いておられる神を信じ、委ね、歩むことができる。これがパウロが苦難のただ中でも持ち続けられる「喜び」の根拠でした。

パウロは、今日の聖書箇所で「喜びなさい」と語ります。しかもそれは、牢獄という極限の状況から書かれた言葉です。命の危険すらある中で、彼は「共に喜びましょう」と、フィリピの信徒たちに呼びかけています。

パウロの語る喜びは「個人的な感情」では終わりませんでした。彼はこう続けます。

「同様に、あなたがたも喜びなさい。わたしと一緒に喜びなさい。」（一八節）

「共に喜びなさい」これこそがパウロの持つ最も強い願いであったのではないのでしょうか。

現代は個人主義の時代です。自分の幸せは自分でつかむ、自分の心の中だけで完結する。

私たちの喜びは、個人の成功や個人の楽しさと結びつけて考えられることが多いです。けれども、聖書が語る喜びは「共に」という言葉がきます。神との関係の中で隣人との関係の中で分かち合われるものが喜びであるということです。

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。」ローマの信徒への手紙二二章一五節のことばです。南山教会の玄関にも飾られています。誰かの苦しみと共に涙し、誰かの祝福と共に喜ぶ。キリスト者が「共に」神に仕え、祈り、賛美するとき、そこに教会としての喜びが生まれます。そしてそれは。わたしたちの喜びは、神が私たちを喜んでくださるという、神との関係の中から湧き上がる喜びです。また神によって与えられた隣人は時に喜びをわかち合ってくれ、悲しみの中にもなってくれる存在です。

分かち合えば喜びは倍、悲しみは半分になります。喜びや悲しみを分かち合えるものとなるようにと進められています。

パウロは、「よこしまな曲がった時代の中で星のように輝く」と語ります（一五節）。

「よこしまな」は原語のギリシア語では（スコリアス）「曲がる」「ねじれる」「歪む」という意味が用いられています。ただ道徳的に悪いということではなく、神のまっすぐな道から逸れてしまった、歪んだ在り方を意味します。パウロの時代、それはローマ帝国という巨大な権力のもとで、人間の命が軽んじられ、不正や偶像礼拝が蔓延し、真理よりも力や利益が重んじられる社会でした。神が望まれる公正や慈しみが見失われている、そのような現実をパウロは「よこしまに曲がった」と表現したのです。

では、私たちが生きるこの時代はどうでしょうか。

今もまた、真実よりも効率や利便性が優先され、SNSやニュースによって情報は溢れているのに、本当に信頼できる言葉を見つけることが難しい時代です。人と比べられ、評価され、追い立てられながら、自分の価値を見失ってしまうこともあります。強い者が正しく、声の大

きな者が勝つ。そうした風潮も、まっすぐな神の御心から見れば、どこか曲がってしまっているのではないでしょうか。

パウロは、そのような時代のただ中で、キリストは「星のように輝く」と言います。星は、夜が暗ければ暗いほど、その輝きがはつきりと見えるものです。つまり、世の価値観に流されるのではなく、神の言葉に根ざして、静かに、しかし確かに光を放つ。それが私たちの使命であるということです。

「曲がった時代」とは、ただ嘆くべき現実ではなく、信仰者が星のように輝きをもって生きる場です。星のように、暗闇の中で誰かの道しるべとなる光となるようにとまねかれています。

私たちの世界には困難や不条理はつきません。孤独や不安はぬぐいきれません。「曲がった時代」の中で、歩んでいます。そのなかでも神に根ざし、確かに輝くよう招かれているのです。その輝きは派手な自己主張ではなく、誠実な歩み、日々の祈り、ささやかな親切に現れます。

苦難の中でも輝く喜び。それは、苦難の中に共にある神の働きに信頼し、信仰の仲間と共に歩み、共に喜ぶことによって育まれていきます。

わたしたちもまた、ただ一人で信仰を守るのではなく、共に祈り、共に仕え、共に喜びを分かち合う者でありたいと願います。神の民として、喜びを灯す光となるよう、主の御言葉に導かれて歩んでまいりましょう。